日本学術会議
九州・沖縄地区ニュース
SCIENCE COUNCIL OF JAPAN
Kyushu / Okinawa area
NEWS
No.123
2025.3

「学術に関する議論」は楽しい

日本学術会議 九州・沖縄地区 代表幹事　内田誠一

九州・沖縄地区の会員、連携会員の皆様には、平素より学術活動の発展に向けご活躍いただいておりますことを、厚くお礼申し上げます。

ご存じの通り、学術会議では、その在り方について、現在様々な議論がなされております。昨年末の2024年12月22日には、第193回総会が臨時開催されました。これは12月20日に発表された「世界最高のナショナルアカデミーを目指して ～ 日本学術会議の在り方に関する有識者懇談会最終報告書」（傍点筆者）を受けてのことです。同報告書では、有識者懇談会において「学術会議に求められる機能を発揮するためには、国の機関のままの改革では限界があり、国とは別の法人格を有する組織とすることが望ましい」という同懇談会見解および政府方針（いずれも2023年12月）の下、次の①～⑦の基本理念に基づいて議論が進められてきたことが述べられています。

①会員の主務大臣任命を外し、海外アカデミーのように政府は会員選考に関与しない
②主務大臣による法人の長の任命と中期計画の認可は行わない
（独立行政法人のような組織にはしない）
③国の機関のような人事・組織関係制度や会計法令による厳格な制約を外し、マネジメントの自律性を高める
④必要な法定事項以外は学術会議の内部規則等に委ねる
⑤活動・運営や会員選考の自律性を前提としつつ、外部の意見を幅広く聴く仕組みを担保する
⑥使命・目的に沿って活動・運営していることを国民に説明する仕組みを担保する
⑦必要な事務局体制の強化を図るとともに、使命・目的に沿って自律的に活動・運営し、期待される機能を十分に発揮する学術会議に対し、国が必要な財政的支援を行うことを明らかにする

そして第193回総会の議論を受け、同日光石会長は談話を発表し、「今後、日本学術会議は、科学的助言機能の強化、科学に関する各種ネットワーク機能の強化、国際活動の強化、そしてそれらを支えるための事務局機能の強化等、法人化を含む改革をより良い役割発揮のための機能強化につながるものとして実現していく」と述べていらっしゃいます。なお、本稿執筆時点（2025年1月末）では、法人

化について確定していません。また一部からは法人化中止の要請書が提出されています。法人化の結論はどうあれ、「良い役割発揮」こそが会議関係者全員の目的であり、そのため日々ご尽力いただいている光石会長ら執行部の皆様には心よりお礼申し上げる次第です。

このように昨今の総会では「学術会議に関する議論」が多くなっていますが、学術会議の本務はもちろん「学術に関する議論」です。第191回総会（2024年4月）では，初日の午前中に，我が国の研究力強化に関する3件の招待講演がありました。いずれも「これぞ学術会議！面白い！！」と思える内容でした。特に豊田長康先生（鈴鹿医療科学大学）のご講演は、これまでの研究指標や研究施策を，各種データに基づいて「めった切り」するという、まさに痛快（この場合の「痛」は、筆者自身が痛いところを突かれていることも意味します）なものでした。この発表スライドは、https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/sokai/siryo191-2-1.pdf からもご覧いただけるようですので、ご興味あれば是非。

また、第三部会の事業にはなりますが、8月に「研究者になって世界を駆け巡ろう ～社会課題の解決に取り組む研究者概論」と題した学生向けシンポジウムを開催しました。大変盛況で、150名もの学生が対面・オンラインで参加してくれました。5件の「アツい」講演の後に、参加学生と会員との対面グループディスカッションがあったのも印象的でした。こうしたアウトリーチも、本会議の極めて重要な任務であり、研究力低下を抑えるためにも、さらに強化すべきだと信じております。

そして、我らが九州・沖縄地区も、2024年10月9日に鹿児島大学様のご尽力により、「世界遺産・奄美群島固有の生態系と文化的多様性～次代へつなぐアマミの宝～」と題した学術講演会を同大にて開催いたしました。 タイトルに「多様性」とありますが、講演も極めて多様で、「アマミ」を軸足として、その「植物生態」「動物生態」「言葉（方言）」そして「音楽（島唄）」とトピックとしたものでした。学術の間に壁がないことを示す好例で、まさに「学術会議！面白い！！」という企画でした。参加者も202名（現地104名、オンライン98名）と、ここ数年では最多となりました。本当は小中高生にも参加していただきたかったのですが、10月の平日ということで叶いませんでした。動画コンテンツも諸事情により今回は公開できず、いまだに「もったいない」という気持ちでおります。この辺は、今後の課題であると感じております。なお、次年度は熊本大学様主導での開催が予定されております。

このような「学術に関する楽しい議論」の輪がさらに広がりますよう、九州・沖縄地区会議の会員・連携会員、関係各位の皆様には、今後とも日本学術会議の活動へのご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

科学者懇談会の開催

令和6年10月に鹿児島大学において科学者懇談会を開催いたしました。

学術を取り巻く環境が変わる中、日本学術会議の会員と各地域で研究活動を行っている連携会員や研究者との間で、意見交換や情報共有を行う貴重な場となりました。

今回の科学者懇談会では、鹿児島大学に日比谷副会長にお越しいただき日本学術会議の活動等についてご報告いただいた後、日本学術会議への要望やあり方などについて意見交換が行われました。

令和6年度　科学者懇談会

【日時】令和6年10月9日(水)12:30～13:40　【場所】鹿児島大学キャンパス内

日本学術会議　副会長　日比谷 潤子
九州・沖縄地区会議　会員／代表幹事　内田 誠一

鹿児島大学　学長　佐野 輝
理事（研究・情報担当）　井戸 章雄
理事（総務担当）　橋本 文雄
理事（企画・社会連携担当）　岩井 久
理事（財務・施設担当）　藤澤 亘
日本学術会議連携会員・副学長（国際担当）　郡山 千早
日本学術会議連携会員・理工学研究科　准教授　新永 浩子

志學館大学　学長　飯干 紀代子

鹿児島大学で開催した科学者懇談会の様子

学術講演会の開催

令和6年10月9日（水）に、鹿児島大学の共催で「世界遺産・奄美群島固有の生態系と文化的多様性～次代へつなぐアマミの宝～」と題した学術講演会を開催しました。

「世界遺産・奄美群島固有の生態系と文化的多様性 ～次代へつなぐアマミの宝～」（鹿児島大学）

日 時　令和6年10月9日（水）　14:00～16:15
場 所　鹿児島大学 稲盛会館 キミ＆ケサメモリアルホール（ハイブリッド開催）
（鹿児島県鹿児島市郡元１丁目21－24）

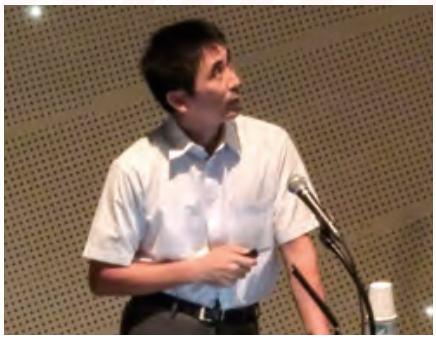
令和６年10月9日（水）に、日本学術会議九州・沖縄地区会議と鹿児島大学の共催により「世界遺産・奄美群島固有の生態系と文化的多様性～次代へつなぐアマミの宝～」をテーマにした学術講演会を、現地とオンラインによるハイブリッド方式で開催しました。

日本学術会議の日比谷 潤子副会長及び鹿児島大学の佐野 輝学長のご挨拶の後、鹿児島大学の郡山 千早連携会員の司会進行の元、同大学総合研究博物館の田金 秀一郎准教授、同大学共通教育センターの藤田 志歩教授、坂井 美日准教授、作曲家であり東京音楽大学の原田 敬子教授にご講演いただきました。

当日は、大学関係者や一般参加者も含め、202名の視聴があり、質疑応答が行われました。

講演1「奄美群島の植物多様性の解明に向けて」

鹿児島大学　総合研究博物館　准教授　田金 秀一郎



2021年7月に奄美大島と徳之島の一部の地域は、沖縄島北部および西表島と共に、「生物多様性」が評価され、ユネスコの世界自然遺産に登録されました。植物は一次生産者として生態系の根幹に位置しますが、亜熱帯で湿潤な奄美群島はその多様性が高く、我が国でみられる植物の約3割に相当する1,838種類、そして世界でも奄美群島にしか分布していない固有植物も65種類（50種12変種3品種）が確認されています。最近でも、すでに絶滅したと考えられていた植物や新分類群の植物が奄美群島から発見され、多様性の全容解明には更なる努力が必要なことが窺えます。一方、近年は温暖化や外来植物の侵入による在来生態系への影響も懸念されています。鹿児島大学総合研究博物館には、100年以上に渡って収集された植物標本が16万点余り収蔵されており、地域の自然を理解し、保全するための基盤情報として広く活用されています。

講演2「奄美の自然を守る：世界自然遺産地域における哺乳類モニタリングと保全上の課題」

鹿児島大学　共通教育センター　教授　藤田 志歩

奄美大島は、その豊かな生物多様性が評価され、徳之島、沖縄島北部および西表島とともに2021年7月に世界自然遺産に登録されました。遺産登録により、これを保護するための様々な取り組みが行われていますが、一方で、観光開発による自然への影響や住民生活との共存が課題になっています。鹿児島大学プロジェクトチームでは、遺産区域の適切な保全・管理・利用に資する基礎データを提供するため、2021年に「世界自然遺産地域における統合型自然環境モニタリングシステム」を立ち上げ、陸域から水域まで生態系を構成する動植物相と、物質循環に関する長期モニタリングを実施しています。このようなモニタリングは、長期継続することで、生態系の動態を把握するとともに人間活動による影響を即時に検出することが可能です。本講演では、森林生態系における哺乳類の分布についてこれまでの研究成果を紹介しました。

講演3「奄美群島の豊かな言語多様性とその消滅危機」

鹿児島大学　共通教育センター　准教授　坂井 美日

奄美群島のことばには、日本標準語や本土方言には見られないような豊かな音韻体系や文法などが観察されます。その言語多様性は、日琉諸語の全貌を明らかにしうるものとして重要な存在です。

しかしながら、奄美群島の言語多様性は今、消滅の危機に瀕しています。その背景には、過去の標準語教育による弾圧、社会構造の変化、過疎化、地域の言語・方言に対する無関心が挙げられます。地域の言語・方言は、その地域の重要文化財であり、人々のアイデンティティの骨子です。その消滅は、地域の文化や知識体系の喪失といった重大な結果に繋がります。本発表では、その消滅危機の現状と対策に焦点を当て、地域コミュニティや研究者による保存・継承活動の事例を複数紹介しました。また、発表者が現在取り組んでいる研究内容の紹介として、方言継承を支援する音声対話型生成AIの開発を通じた未来展望についても議論しました。

講演4「消えゆく言語のうた ～ 創造的発想による島唄継承の未来への試み（喜界島、奄美大島での事例）」

作曲家、東京音楽大学作曲科　教授　原田 敬子

伝統の島唄。言語固有の文字はなく、喜界島では「先祖から預かった宝」と呼ばれ、生活と魂の記憶であり精神文化の音表象です。音楽的にはヒット曲に匹敵するような旋律線、その魅力を繊細かつ大胆に伝える裏声や、独特の唱法に連動する三線奏法など独自の様式に結実した音楽で、消滅危機に直面している言語で唄われます。この貴重な島唄が方言禁止や生活、価値観の変化と連動して衰退期を迎えた1960－70年代から今日まで、唄者、メディア、自治体、有識者ほか多様な人々が行ってきた不断の努力の事例を豊富な視聴覚資料で報告、考察しました。そして「こうあるべきである」論ではなく、各自が継承に自発的に取りくんできた事実が、島唄が生き生きと「我が事として」継承される力であることを確認。しかし消滅危機言語の唄は、いずれ完全に「外国語の唄」のようになる日がきます。人々が何を守り何を捨てるのか、その根拠を「継続的対話」を通して今後も記録→考察し、この地域の精神文化を炙り出しながら、将来的には地域の子どもたちに島唄を通して、歴史、言語、民俗、自然環境、人類学ほか、多様な興味を喚起するような、教育現場での活用を描いている事をお話ししました。

学術講演会の感想（アンケート調査から抜粋）

- 奄美群島の自然・文化の多様性とそれが危機にさらされている現状について、非常に興味深い講演会であった。
- ヒトと自然の共存には不断の努力が必要なのだと思いました。
- 講演会では、先生方皆様の奄美群島への深い愛情を感じられて私も優しい気持ちになれました。
- 方言の研究について、AI による今後の研究の発展性も感じられ、ワクワクした。過去と未来、両方に向かって進めていて、より興味がわいた。

鹿児島大学で開催した学術講演会の様子

お知らせ

日本学術会議九州・沖縄地区会議では、令和7年度に熊本大学との共催により、科学者懇談会及び学術講演会を開催することを計画しております。

詳細につきましては、決定次第お知らせいたします。

日本学術会議 九州・沖縄地区会議

会員一覧

内田　誠一（第三部所属　九州大学大学院システム情報科学研究院教授）
佐々木裕之（第二部所属　九州大学高等研究院特別主幹教授、九州大学名誉教授）
髙田　保之（第三部所属　九州大学カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所特命教授・名誉教授、エディンバラ大学名誉教授）
玉田　　薫（第三部会員　九州大学主幹教授・副学長）
野出　孝一（第二部所属　佐賀大学医学部長・内科主任教授）
馬奈木俊介（第一部会員　九州大学大学院工学研究院都市システム工学講座教授）
丸谷　浩介（第一部会員　九州大学大学院法学研究院教授）
三浦　佳子（第三部会員　九州大学大学院工学研究院化学工学部門教授）

※五十音順

発行　2025年3月
編集　日本学術会議　九州・沖縄地区会議

日本学術会議 九州・沖縄地区会議事務局
〒819-0395　福岡市西区元岡744
九州大学研究・産学官連携推進部研究企画課内
電話.092-802-2320（ダイヤルイン）
FAX.092-802-2391
E-mail　kissomu@jimu.kyushu-u.ac.jp